

第8章 「読み方」指導の特質

第1節 文部省の「読み方」の目的

文部省発行の教師用書では、「読み方」を国民科国語の中心とし、「書き方」「話し方」は「読み方」の中で指導し、「綴り方」とも密接な連絡をとりつつ指導することを教師に求めている。音声言語を新たに取り入れても、国語学習の中心は「読み方」にあるとするのである。

「読み方」は、国語指導の中核であり、その縮図である。即ち「読み方」は単に読むことばかりでなく、書くこと、話すことをそれ自体に包含しており、随つて「書き方」「話し方」及び「綴り方」と密接不可分の関係をもつからである。(1)

そして、「読み方」では言語活動を豊富にさせることを指示し、教材の内容については深く理解することを求め、話し合いや劇演出、朗読、誦読などの学習により、正しく読む力を養うことを目標にしている。

「読み方」は、要するに正しく読む力を養ふことを目標とするものであるが、それがためには単に読むことばかりでなく、種々の操作が必要である。殊に年少の児童に対しては、教材に即して種々の言語活動をさせることが、一面には意味感情に徹して読みを深からしめるゆゑであるとともに、一面には音声言語の基礎練習をなさしめることになるのであるから、或は挿画（掛図）や文章に就いて話をさせるとか、或は文章を暗誦させ、又これを劇的に演出させるとかが、「読み方」に於ける大切な操作となるわけである。かくの如くして「読み方」と「話し方」とは指導の実際に於いて相即一致することが考へられる。(2) p. 28

このように「話し方」を「読み方」に取り入れようとするのであれば、当然、教室では教師と児童とが対話し、児童と児童との対話が求められる。教師の一方的な知識の詰め込みではなく、児童が言語活動を通して学ぶような指導を求めている。この根底には、言語・文章が思考感動と不可分であるという言語観が表れ⁽³⁾、教師用書では言語を思想伝達の道具ではなく、「言語を通して思考し、感動して思想を構成する」ものであり、言語は思想と一体化したものであると定義している⁽⁴⁾。

即ち国語指導の第一義諦は、国語そのものと分つべからざる国民的思考感動を通じて国民精神を涵養することにある。換言すれば、国語は国初以来国民がなし来たつた思考感動の結晶体であり、国語指導は、この思考感動と一体たらしめることによつて、国民精神を啓培することにあるのである。(5)

「思考感動」は作中人物の心情や態度に対して感動することであり、それが「国民精神」になるのであるから、作中人物の心情について、批判的に取り上げたり、反対することは当然許されない。国家に

奉仕し、軍人援護する「国民精神」を扱う教材であれば、その精神は児童の学習目標となるのである。

一方、教師用書では実物教授に対して反対している。実物教授自体は必要なものであるが、国語教育では、文章などの言葉の学習が中心であり、実物について取り上げることは別の教科目の内容となるからである。「アサヒ」の教材で、地球の自転や惑星系を学ぶのは、他教科目の範囲であり、総合としての学習ならばそれも可能であるが、国語教育としてはあくまでも言語の学習であるべきだとしている。

言語を思想交換の具とのみ見る者は、ややもすれば言語そのものを形式としてこれを軽視、言語発表の題目たる材料を内容と考へてこれを尊重する結果、言語指導をして恰も実物そのものの指導の如き観を呈せしめる。もとより実物そのものの指導は教育上大切なことではあるが、少くとも国語指導に於いては言語が主であり、実物は客であつてこの主客を転倒するに至つては、既に国語指導は存在しないといはなければならない。(6)

国語教育を言語の学習であると位置づけ、実物教授に深入りしないように求めているのであるが、目標はあくまでも「国民的思考感動を通じて国民精神を涵養すること」である。現実にも実物の内容に深入りすることにならざるを得ない。ここに言語の学習を進める言語活動主義と、実物の内容である軍国主義との関係性が見られる。

第2節 軍国主義教材の取り扱い

第1項 4年「錦の御旗」

山梨県女子師範学校附属国民学校（以下「山梨女子附属」）は1941(昭和16)年5月の研究発表会で四年『初等科国語三』「錦の御旗」(7)の実践報告を伊藤武雄訓導が行っている(8)。「錦の御旗」は太平記を口語訳した教材で、村上彦四郎義光が大塔宮のために、奪われた錦の御旗を取り戻す話である。伊藤武雄は授業の目的を「村上義光の烈々たる忠誠に感ぜしめ、国体の尊厳を象徴する錦の御旗の絶対性を理解せしめ国語力を陶冶する」ためであるとし、文章の内容を理解し、そして文中に登場する錦の御旗自体が、国体を象徴することを理解させようとしている。「錦の御旗の絶対性」を理解することは、絶体唯一の天皇の立場を理解することになっている。いわば、絶対性を理解することが目標なのである。

時間配当は4時間で、通読、精読、味読の三読法が用いられ、精読に2時間をかけている。実際に授業が行われた味読である第四時の目標は、「朗読から誦読に導き義光の忠誠に深く感銘させる。更に話し方を中心として言葉の稽古をさせる。」とあり、朗読と誦読から主人公の忠義を深く感動させることである。本時の指導過程は、次の6段階になっている(9)。

- 1、指名読に依り大体の構想を復習する。
- 2、朗読練習
- 3、誦読
- 4、話し方練習

5、感想発表（記帳）

6、次時予告

この第四時の授業の中心は朗読練習である。その中で大塔宮の「辛苦を思ひながら」朗読する場合は「わずかに」「中にも」「どうしても」を「稍強く」読む指導をしている。義光の場合も、「忠勇に感激しながら読む」とあり、内容理解をした最後の授業で朗読するときに、感激すること、辛苦を思うという行動をさせることで、児童が登場人物に感情移入させていこうとするのである。このように「味読」段階で「忠勇に感激しながら読む」ことで、宮に対しての忠誠心を、その事実として表現から読み取るのではなく、内面から感激していく、いわば惚れていくことによって、自己内へ取り込もうとするのである。諳誦にも「文中の人の如くせしめ」とあり、作中人物の忠誠心を自己内に取り込み、諳誦によって再現することで、理解と表現の一体化から、教材に登場する人物の心情や思想を吸収しせさようとしたのである。児童は読み、話すの学習から義光に対しての感激し、義光の立場に自らの身を置き、宮への忠誠心を実感して、宮への忠誠心を湧かせようとしていたのである。

この忠誠心の自主的な体得は「話し方練習」にも見られ、「お話として発表」「簡単な身振りをつける」ことから、作中人物の心情と行動とを追体験し、劇的に読ませることで、発声や行動の身体行為から忠誠心を涵養させようとした。言葉を扱うことを中心にしていることを除けば、修身の授業と変わらない授業案であり、国民科国語の修身化になっていて、国語教育の独自性は失われつつあった。

第2項 3年「ぬもん袋」

石川県師範学校附属国民学校は1942(昭和17)年12月に研究発表会を行い、三年『初等科国語二』「十五 ぬもん袋」の実践案を米田政栄訓導が提示している(10)。「ぬもん袋」は戦地の兵士に慰問袋を送り、兵士からの感謝の手紙を家族で読む場面で終わる教材である。授業案は文章の構成に合わせて五時間の計画を立てていて、第二時を本時として提出している。教材の趣旨は次の三点になっている。

1. 一家全体で心を込めて作った慰問袋と、それを受け取った前線将士の喜びとを読み取らせる
2. 大東亜戦争の完遂に、銃後と戦地と一体になつて邁進する姿を感得させる
3. 特に本時は、戦地を思ふ暖い心に整へられた和気藹々の情愛を会得させる

第二時の場面は、家族が「ぬもん袋」に何を入れるかを話している場面である。指導過程は、「自覚」「体得」「省察」という三段階に分けていて、「体得」の「読む」では、「どうして作ることになつたか」「どんな風にして作ったか」と、慰問袋を贈ろうとした理由と何を入れるかという方法を読み解く学習になっている。このうち、理由である「どうして作ることになつたか」の質問に着目したい。「どうして作ることになつたか」という理由を答えるには、兵士へ慰問袋を贈ろうとした心情を読み解くことであり、兵士への奉仕の精神を読み解くことになる。つまり、軍人援護の精神をここで理解させようとしている。取り扱う教材の本文の冒頭は次のようになっている。

夕飯のあとで、火ばちにあたってみかんとをたべながら、みんなで、戦地の兵隊さんの話をしました。

「めっきり寒くなって、兵隊さんたちも、さぞ、お困りだらう。」

と、おぢいさんがいはれました。

「兵隊さんに、このみかんとをあげたいなあ。」

と、弟が、たべかけていたみかんとを見せました。

「おかあさん、うち中で、いもん袋を作って送ってあげませうよ。」

と、私がいふと、

「それはいいね。では、これから、こしらへることにしませう。」

と、おかあさんがいはれました。

「さあ、どんな品物を送ってあげるかな。ひとつ、めいめいで考へてみよう。」

と、おとうさんがいはれました。

作中人物の家族が「兵隊さんたちも、さぞ、お困りだらう」「兵隊さんに、このみかんをあげたいなあ。」という軍人援護の精神を持っていることで、家庭でも慰問袋を作ることを奨励しているのである。この心情を理解することが、先の質問の答えにあたる。文章の表現を客観的に分析する場合は、文章を冷静に検証するので、登場人物の心情を客観的に判断することができる。しかし、兵士に慰問袋を贈りたいという作中人物の心情を理解することは、文章表現理解ではなく、軍人援護の精神、目標の「銃後と戦地と一体になつて」を理解する学習になっている。授業案には「戦地を思ふ家族の心情、その底に流れる家族愛を理會させる」とあり、文章の表現を学ぶのではなく、文章に描かれている人物の理解や思いやりを学ぶことになっている。それも、作中人物は家庭の様子であり、登場する人物は、学習する児童と同年齢に設定し、児童は作中人物に自分を重ね、自分ならばどのようにするかなどと、人物に自分を投影して読むことになる。このように、児童が作中人物の心情を理解し、読みの過程で追体験することで、教材に描かれている思想を体得していくのである。

「みもん袋」の学習は、目標を作中人物の心情読み取り、軍人援護の態度に感激し、一家全体で軍人援護する「情愛」を理解することで、軍国主義を体得し、児童のみならず、家庭でも実践させようとした意図が見られた。

第3項 2年「支那の子ども」

奈良女子高等師範学校附属国民学校（以下「奈良女子附属」）では、1942(昭和17)年5月に『初二各科の教へ方と研究授業』(11)を刊行し、その中で、2年「支那の子ども」の授業案を発表している(12)。「支那の子ども」は中国の街中で日本軍の兵士を見かけた中国の子どもが感激し、日の丸の歌を歌う教材(13)で、侵略した地域の人々が日本軍に感謝し、日本軍の侵略行為を正当化する意図が見られる教材である。奈良女子附属ではこの教材の意義を、日本軍の仕事と地域貢献について理解することを目的にしている。

巻二「ラジオノコトバ」「西ハタヤケ」等の教材によつて大陸に眼を向けさせられた子供達は、前課「病院の兵たいさん」の指導によつて東亜建設に精励された皇軍将士への感謝から、更に本課に於いて支那の子どもも亦皇軍に親しみその仕事に協力している生活を読みとらせなければならぬ。そこに日支親善、更に日滿支を一体とした共栄圏確立への基礎があるのである。(14)

「指導要項」には、「八紘為宇の精神に基づき異民族と融和する感情を涵養する」を指導し、「支那の子供が、皇軍とともに東亜建設の活動に協力している相を読みとらせ、この子供達に親しむ態度を培ひ、それぞれの児童にも亦建設への足どりを固めるやうに心掛けさせる。」とあり、文章表現の学習、ことばの学習ではなく、軍国主義思想教育になっている。授業ではこれら指導を児童の生活を結びつけて学習することを次のように求めている。

子供は日々の新聞で、雑誌で、更にラジオのニュースで常に支那の地に於ける皇軍の活躍の様は耳にし、口にしていることであらう。又、自分の父が、兄がこの地に於いて活躍している子供もあるであらう。これ等の生活と結んで、兄から父から聞いた支那の町の様子や、支那の子供のこと等を話させ、本文を読む、素地に培ひ、兼ねて東亜新秩序建設の精神を彊固なものとする。(15)

この授業の時間配当は五時間で、次の通りである。

第一時 全文読み方・漢字発音の指導・全文大要の把握・読み方練習

第二時 本文始めより百七頁一行迄を中心とした指導。(読みぶりの指導) (挿画掛図による話

し方指導)

支那の町の光景読み出し。荷車をひく兵隊さんと町の人々の様態読み出し。治安を保つ皇軍への感謝、

第三時 百七頁二行より本文終りまでを中心とする取扱(精案後出)

第四時 全文読み方練習「ことばのおけいこ」(三)を中心として取扱・「ことばのおけいこ」(三)の読み方及び対話指導。

第五時 全文朗読練習、ことばのおけいこ(一)及び(二)の指導・漢字、仮名遣の整理と運用。
(16)

授業案は第三時であり、中国の子ども達が登場する場面を扱っている。本時の指導過程は次の通りである。

指導過程

1、全文を読ませる。

2、前時分を読ませる。

「せまい」「はうちやう」「あひる」その他のことばの発音に注意して読みを正確に導くやうに留意する。

3、前時分をまとめて話させる。

「支那の町の様子はどんなでしたか」

「日本の町とちがつたところはどんなところですか、売っている品物は、町の通りは」

等と発問して話させ尚

「日本の兵隊さんが、車を引いたりしてこの町を通る時、どんなことをしたのでしたか。町の人々にどんなにして通しますか」等と発問して文の内容を話させる。

4、本時分を二、三名に読ませる。

5、本時分範読して聞かせる。

6、更に五、六名に指名して読ませる。

発音抑揚に注意し、支那の子供が皇軍に親しんでいる様子が読みぶりに表はれるやうに読みの指導をする。

7、次のやうに発問して読みを深める。

イ、支那の子供は何故「兵隊さん」「兵隊さん。」と言つて来るのでせう。

(いつも日本の兵隊さんからかはいがられているから。日本の兵隊さんがやさしいから。)

等と話させるやうに導く。

ロ、支那の子供は何故、がやがやわからぬことばを言ふのでせう。

(それが支那語であることに気づかせ、子供達が使っている言葉が日本語であることを知らせ、国語を正しく使ふやうに注意する。)

ハ、支那の子供はどんなことをして兵隊さんのお手伝をしますか。

(車のかち棒をとつて引ぱつたり、車の後押しをしたりします。)

二、日本の兵隊さんはどんな心持でせう。

ホ、日本の兵隊さんと支那の子供はどんな歌を歌ひましたか、

8、「日の丸」の歌を歌はせる。

「皆さんも支那の子どもと一しよに兵隊さんに加勢してゐる心算で『日の丸』の歌を歌ひませう。」と言つて教児ともに斉唱する。

9、本時分を読ませる。

10、「ことばのおけいこ」(二)を取扱ふ。」

イ、「ことばのおけいこ」(三)を読ませる。

ロ、同前対話的に読むけいこをさせる

支那の子供 五名、兵隊さん 一名 を指名する

(気分をこめて読むやうに注意し、何度も読ませて読むことの徹底をする。)(17)

この授業案の特徴は、「支那の子どもと一しよに兵隊さんに加勢してゐる心算」にあり、作中人物を国籍に拘わらずに学習する児童と同年代にし、作中人物の立場と心情を理解することにある。兵士の日常を理解するのであれば、兵士の日常を詳しく調べればよいのであるが、このように作中人物の立場で考えさせ、作中人物が持つ日本軍への敬意を理解させ、日本語が外国でも使用されていることを理解し、日本軍の東アジアへの侵攻を正当化させようとしているのである。

作中人物の心情を読み取らせ、作中人物の行動を学び、それを学習者に感動させ、共感させていく方法は、巧みに学習者に軍国主義思想を植え付けていく。教材では、日常生活の場に兵士がいて、それを中国の子どもが手伝っている。生活の中に兵士がいて、それを支援していくことの重要性を学ばせようとしているのである。それを「読みぶり」から学習することを求めていることから、「読み方」では「話し方」など朗読、誦詠などにより、作中人物を追体験することによって、児童は軍国主義化を疑似体験していくことになっているのである。

奈良女子附属の白井勇訓導は児童の生活との関係について次のように述べている

教科書を教へる前に、先ず生活を充実させねばならぬ

その生活を、教科書を標準としてその要求する所を達するやう取扱ふべきである(18)

児童の生活を変えることが教育的な配慮であると述べているが、この「生活」とは戦時下の軍国主義の生活であり、軍国主義の生活を教科書を「標準」として学習することになる。つまり、「支那の子ども」では、作中人物の子どもと同じ軍人支援の生活をするを求めているのである。国民学校期の生活は軍国主義の戦時下の生活であり、その生活を促進するのが、言語活動主義教育である。つまり、国民科国語は言語活動を通して、軍国主義思想を教えようとしていた。

第3節 生活教材の取り扱い

国民学校開始時期の1941(昭和16)年7月に公開授業を実施した師範学校附属に福井県鯖江女子師範学校附属国民学校(以下「鯖江女子附属」)⁽¹⁹⁾がある⁽²⁰⁾。その発表要項⁽²¹⁾には、「学級教育のねらひ」として「有難さを感じる心」「みんなと共に生きる心」「喜びに生きる心」の三点を上げている⁽²²⁾。これらの目標を基盤として、各教科の指導案が作成されている。

国民科国語の公開授業では、1年生で松村伊佐武訓導が「タナバタ」を扱った授業案を掲載している(図8-3)。この授業案の「はなしあひーよむーかくーよむーはなしあひーおしごとーよむ」には芦田恵之助の「七変化教式」の影響が見られる。芦田恵之助の影響は福井県の国語教育の特徴であった。⁽²³⁾。

鯖江では七夕祭を旧暦で行い、ちょうどこの教材の時期と重なり、地域の行事に重ねた生活教材の典型である。教材は以下の通り、みじかい詩である。

タナバタノ
アマノ川。
ピカピカト
オホシサマ。
ニコニコト
オホシサマ。

図8-3 福井県鯖江女子師範学校附属国民学校 1年「タナバタ」の指導過程

この教材の取り扱いの特徴は、〈指導にあたって〉の「くどくどしい説明で行くよりはあくまでよみをくり返して詩に親しませる。更に誦誦へ、暗写へと進んで行く。」とある通り、詳しい説明をするよりも、繰り返して音読し、誦誦していくことで、内容に親ませようとしている点である。この音読、誦誦により親しむことは、先の「錦の御旗」の場合と同じである。声に出して読むことは、内容と無関係に読むのではなく、内容を自分の内面に入り込み、文章の表現から内容を分析し、内容を疑似体験して、心身ともに自らの内面に据えてしまうのである。それも、何度も朗読し、誦誦することで、文章の思想は批判すること無く、内面に入りこんでしまう。つまり、軍国主義教材も、日本的な情緒を味わう生活教材も、同じ方法によって教材内容を理解させようとしていて、両者とも教材本文を批判することなく、教材の中に流れている思想を吸収してしまうことが共通している。

第4節 物語教材の取り扱い

第1項 2年「牛若丸」

石川県師範学校附属国民学校⁽²⁴⁾は1941(昭和16)年5月3日～4日に教科講習会を開催し、米田政栄訓導が2年「牛若丸」の授業を公開している⁽²⁵⁾。その授業案の指導過程には、「自覚」「体得」「省察」が明記され、三段階の教授法に依っている(図8-4)。この「自覚」「体得」「省察」は他教科・科目でも使われていて、同校の方針である。「自覚」「体得」など児童の活動を中心とした語であり、児童の自発的な学習をさせようとする意識がうかがえる。また、「体得」については、「遊びを通して、文と一体となる」ことを指導法に入れている。この点は、国民学校の目標に沿っている。

図8-4 石川県師範学校附属国民学校 2年「牛わか丸」の指導過程

この授業案からは、『ことばのおけいこ』の問題が読み取れる。『ことばのおけいこ』は教科書と同時に使用する言語学習用教科書であるが、使用方法については詳しく書かれていない。教師用書には『ことばのおけいこ』に連関する教材が掲載されていることだけが書かれている。米田政栄は『ことばのおけいこ』を「何時如何にして扱ふかが初等科一・二年国語教育の問題」とし、「これを如何にして「よみかた」と一体ならしめるかに実践家今後の工夫がかかつてある。」と述べ、『ことばのおけいこ』を授業に導入することが難しく、困惑する姿が伺える。そして、

扱ひ方にはかくあらねばならないといふ決定的な型のあらう筈もなく、だからといつて気儘に使はれてもならず、其の扱ひが適宜「よみかた」の授業に織り込まれながらもこの故に必然性がなくてはなるまいと思はれるのである。

と、扱い方を提示することを願っているが、その意識には、文部省に対する非難さえ感じる。現場の教師には、「扱ひ方にはかくあらねばならないといふ決定的な型」に依存する傾向があり、その型がないと授業で苦勞するという、指導法を文部省に依存する姿勢が見られる。公開研究会の要項にこのような意見を掲載するからには、それなりの覚悟があり、他校の訓導にも同様な意見が多かったと推察される。

それは、『ことばのおけいこ』の質や内容が問題なのではなく、「扱ひ方にはかくあらねばならないといふ決定的な型」を求める教師側に問題があった。このような意識の教師がイデオロギーの波にのまれてしまうのであろう。教師の意識の問題がここに見られた。

第2項 5年「雀の子」

福島県郡山市金透国民学校⁽²⁶⁾は1941(昭和16)年6月に研究発表会を実施し、神野忠雄訓導が5年「雀の子」⁽²⁷⁾を扱っている⁽²⁸⁾。この教材は移行措置の教材であり、本文は国定第四期の教科書を使っていた。金透国民学校はもともと研究体制の整った学校で、国民学校期にもいくつかの成果を発表している⁽²⁹⁾。また、戦後は地域教育計画の「金透プラン」⁽³⁰⁾を発表している。国民学校期の同校の指導過程は、「とく、とる、うつ」の三段階である⁽³¹⁾。しかし、指導案には、「(一)よむ、(二)とく、(三)よむ、(四)かく、(五)よむ、(六)とく、(七)よむ」とあり、芦田恵之助の「七変化教式」をそのまま踏襲したものであった(図8-5)。

図8-5 郡山市金透国民学校 5年「雀の子」の授業案の指導過程部分

指導過程の後には指導の構造が図式されているが、それも「七変化教式」を援用したものであり、独

自性は感じられない。また、教師用書に書かれている、「話し方」「書き方」との関連について書かれていない。また、「(二) とく」では、「よみ得たものを師の力でまとめ、道をたがへず、方向をあやまらず、研究の歩みを進める心構えを作らせる」というところでは、児童の言語活動重視の姿勢は見られない。(三) も同じである。

図8-6 郡山市金透国民学校 5年「雀の子」の授業案の指導の図化部分

この図8-6も芦田恵之助の影響が大きい。芦田恵之助の指導過程が国民学校期でも支持されたことを示している。国民学校が開始された当初は、以前の指導過程の影響が大きく、従来の教育をそのまま引きずる例が見られた。金透国民学校の実践には、総合的な言語活動の重視が見られず、従来の指導過程が見られた。それは、国民学校の言語活動主義が現場に浸透しなかった例として読み取れよう。

